

平成15年度平城宮跡 利用実態調査の概要

はじめに

当研究所では平城宮跡の利用実態調査を1967年から1996年までに9回実施している。平成15年度(2003年度)は10回目にあたる調査を、文化庁から受託した「大極殿及び殿院の復原研究」の一環としておこなった。今年度の調査は、第一次大極殿院地区の復原公開を見据え今後の平城宮跡の整備を検討するための基礎資料を作成するためのものである。具体的には主に、1998年からの朱雀門の建物と東院庭園の復原公開による宮跡の利用実態の変化を把握することと、既往の調査の継続としてデータを蓄積することを目的とした。

今年度調査の詳細な結果は『特別史跡平城宮跡平成15年度秋季及び冬季利用実態調査報告書』(奈良文化財研究所・株総合計画機構、2004)に掲載されているため、ここでは調査内容の留意点や、主な調査結果と考察を記す。

なお、平城宮跡の利用実態を把握できるデータとしては今回のような調査の他に、3ヶ所の展示施設(平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園)で計測している日ごとの入館者数、各展示施設の見学申込み団体数、ボランティアガイドの利用者数、管理部文化財情報課で実施しているアンケート(展示施設出入口に用紙を設置)結果があり、本調査の考察でもそれらを用いた。

調査内容

今年度の調査内容は表2のとおりである。

来訪者数の観測 今年度の調査では初めて通年で実施した。1日の来訪者数は主に季節、曜日、天候によって大きく変化する。したがって、調査は四季全てで休日と平日に1日ずつ実施した。雨の日を避け調査予定日が雨天の場合は延期した。

アンケート 今年度は特に見学者の利用実態を把握するために、見学目的の来訪者の回答を多く集める方針をとった。したがって、アンケートの集計結果は見学目的の来訪者の回答に偏り、そのままでは実態を表さない項目があるため注意を要する。

質問項目は表2のとおりである。既往調査との比較のために同内容の質問を部分的に残しつつ、新規の質問も設けた。同内容の質問については、なるべく他の調査と

比較できるような聞き方をした。調査結果は他の史跡と比較することもあるため、内容に共通性をもたせることができ今後の課題である。このことは、アンケートだけではなく他の調査についても当てはまる。

質問内容については、事前に試験的な調査を行った後、質問方法や項目数の削減を検討し、見学目的の来訪者とそれ以外の来訪者とで異なる質問項目を設定した。しかし、一票あたりの聞き取り時間に20分程度を要する分量となった。

利用形態の観察 面的な観察により、出入り口での来訪者数観測調査やアンケートと内容を相互に補完する。

団体及び事業者への聞き取り 団体による観光や学校教育面での利用に関する情報を多方面から収集する。

主な調査結果と考察

出入口別の利用者数は朱雀門周辺が最も多かった。前回の調査では資料館と遺構展示館近くの出入口が最も多かったのに対し、朱雀門の建物復原による宮跡利用の変化を如実に反映した結果といえる。また、今回の調査で初めて朱雀門見学者の概数が把握され(春季休日調査で865人)、宮跡の見学施設のうち朱雀門が最も利用者が多いことが明らかになった(アンケート結果では何らかの見学施設を利用した回答者の73%が朱雀門を見学)。なお、「歴史学習や体験」と「観光」を合わせた、見学目的の来訪者の割合は来訪目的別利用施設、施設利用者数、総来訪者数の比較により、全体の1~2割と推測できる。

朱雀門の見学者は、多くが団体であり他の施設を見学しない割合が高い(33%)。また、「観光」目的の回答者の83%が朱雀門を見学した。これは朱雀門の見学に団体観光の立寄りが多いことによる。朱雀門の前は国道に面し駐車場とトイレが揃っているため、観光バスの立寄りに適している。

このような観光バスの立寄りやすさは、第一次大極殿復原公開後の見学者動線を計画する上で重要な要素である。『平城遺跡博物館基本構想資料』(文化庁、1978)のとおりに主要な入口を朱雀門のある宮跡南側にすれば、朱雀門、大極殿という適切な順序の見学経路が設定できる。しかし問題点もある。今回の結果では見学目的の回答者の過半数が滞在時間1時間以下である。この時間では両方の見学には余裕がなく、大極殿のみの見学も多くなると予想される。したがって、大極殿に近い宮跡の北側や

表2 平成15年度平城宮跡利用実態調査の内容

	日時	場所	方法	項目
来訪者数の観測	春夏秋冬四季の平日と休日 日出から日没まで（秋季は、展示施設が休館となる月曜日にもおこなった）	宮跡の主な出入口約15ヶ所	観察	入退園者数、性別、年齢層、グループ構成、交通手段、駐車台数
アンケート	秋季の休日と平日 午前・午後	宮跡内の利用拠点11地区	地区別に調査員が調査票に従い来訪者に質問をして回答を記録 520票を収集	質問項目は下記のとおり
利用形態の観察	秋季の休日と平日 7時から16時30分（来訪者数計測調査と同日）	宮跡内の利用拠点13地区	観察（地区別の毎時0分と30分の状況）	人数、利用形態、位置
団体及び事業者への聞き取り	主に秋季と冬季		聞き取り	平城宮跡の利用に関する全般（対象は、小中高等学校、団体来訪者、バス会社、行政、レンタサイクル店）

アンケートの質問項目

- | | | | |
|---------------|---------------------|--------------------|---------------|
| 1. 来訪回数 情報入手先 | 7. 宮跡内の道路・交通に関して | 13. 職業 | 19. 遺構表示の理解度 |
| 2. 来訪目的 | 8. 設置希望施設 | 14. 居住地 | 20. 解説板の利用 |
| 3. 滞在時間 | 9. 希望整備内容 | 15. 自宅からの交通手段 | 道標とサインに関する不満 |
| 4. 利用地区・施設 | 10. 歴史や文化に関する興味 | 16. その他（自由回答） | 21. 道標とサインの利用 |
| 5. 宮跡内の移動手段 | 11. 宮跡の文化財的価値に関する知識 | 17. 見学ルートと見学施設（図示） | 道標とサインに関する不満 |
| 6. 印象 | 12. 性別・年齢 | 18. 宮跡以外の来訪場所 | 22. 希望するサービス |

西側からの入園にも配慮する必要がある。その他、多くの来訪者が鉄道線路を横断するという問題や、朱雀門から第一次大極殿へ移動する時に通過する朝堂院地区との南側の整備が検討課題となり、「眺望及び空間展開の演出」（前掲『平城遺跡博物館基本構想資料』）も求められる。入口の問題は展示解説施設の設置位置にも関係する。また、展示解説は短時間の見学にも配慮する必要がある。

前回までの調査同様、今回の結果も宮跡の全来訪者数は増加傾向にあることを示している（年間来訪者数は推定98万人）。今年度、日出から来訪者数の観測をした結果、早朝の利用が多いことが判明した。夏季平日調査日では9時までの入園者数が全日の21%を占めた。また、冬季の来訪者も少なくないことが分かった。

大膳職地区は前回の調査と同様に、ほとんど滞在者がいないことが確認された。道路により宮跡の主要部と分断されていることが一因と考えられる。この地区は第一次大極殿に隣接するため、復原公開に合わせて利用方針を再検討する余地がある。

東院庭園とその周辺地区の滞在者数は他の地区と比較して平均的であった。東院庭園の入園者数は他の見学施設より少ない傾向にあるが、このことはその原因が立地以外にもある可能性を示唆している。

今後設置が必要な施設では「トイレ」「ベンチやあずまや」「屋内休憩所」を必要とする回答の割合が高いことが目立った。これは全ての来訪目的で当てはまる。トイレは現在各展示施設に隣接して設置しているが、施設から離れた場所にはまだ不足していると判断できる。また、ベンチやあずまや、屋内休憩所は現在数ヶ所にしかなく、来訪者の要望に答えるためにどのように便益施設を設置するかを検討する必要がある。

希望する整備タイプについては、「あまり手を加えず、現在の自然や歴史資源を保存する」という現状保存型の回答が51%と半数を超えた。前回調査の「現状保存を中心とした整備」の25%からほぼ倍増した。この変化には、

朱雀門の復原公開や第一次大極殿の復原工事開始が大きく影響し、宮跡の特長である自然を感じられる空間的広がりの重要性に対する意識が高まってきていると推察される。一方で、「歴史学習や体験」を来訪目的とする回答者だけは、「一部の施設は復原し、公園的利用が可能な整備を図る」の回答が最も多く（42%）、朱雀門や東院庭園などの復原施設が見学者の期待に応え遺跡の理解に一定の役割を果たしていることが窺える。

歴史や文化に関する興味や宮跡の文化財的価値に関する知識を問う質問では、「ウォーキング、ジョギング」「散歩や休養」を来訪目的とする回答者が、興味が強くかつ知識が多いことが分かった。また、「歴史学習や体験」「観光」以外の来訪目的の回答者の1割前後が朱雀門や資料館を見学した。これらのことから、見学目的以外の来訪者も宮跡を単なる都市公園として利用しているのではなく、その歴史性や文化的な要素を評価して利用していると推測できる。

希望するサービスでは、発掘現場の公開・説明会、情報の公開（H.P.やパンフレットの充実）特ない、が各3割であり、体験教室や勉強会は少ない。また、県内居住者はイベントの開催希望が4割と多い。管理に関しては、利用マナーの悪さに関する自由意見での回答が目立つ。

団体や学校教育での利用に関しては、宮跡が世界遺産であることと施設が整い無料であることが誘致要因となっており、雨天時も利用できる休憩施設や子供向けパンフレット配布の要望が多いことが分かった。

結び

今年度の調査では、有用な知見が数多く得られ、既往の調査の継続としてデータの蓄積をすることもできた。今後はこの成果を活かし、第一次大極殿復原公開を見据えた今後の平城宮跡整備のあり方の検討を進めるとともに、一般論として史跡整備計画策定のための利用実態調査（利用者研究）の方法論を整理していくたい。

（中島義晴）